
あなたは、素敵な恋をしていますか？それとも・・・

つきかわみさと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたは、素敵な恋をしていますか？それとも・・・

【Nコード】

N6868E

【作者名】

つきかわみさと

【あらすじ】

毎日を何気なく平凡に送っていた主婦小百合ある日子供とデパートに出かけ、そこで一人の男性祐二と出会う。日が経つにつれ、しだいに祐二に引かれていく小百合小百合の想い、祐二との恋そのために、色んな人を巻き込んでいってしまう2人これから、そんな運命が待ち構えてるとは知らずにデパートの屋上へ続く階段へと一歩一歩上がっていく。

ある主婦の昼下がり（前書き）

初めに・・・

この本を読んでくださる方々へ

女性は結婚したら、女ではなくなると思いがちです。

母親だったり奥さんだったり、だけど女性は恋をすると女として生まれ変われるのです。

恋愛の仕方は人それぞれです、でもそれは恋をしたら
けてマイナスになることではなく、むしろ人間として
女性としてプラスになるような気がします。

ある主婦の昼下がり

第1章・・・

1990年、夏・・・

今思えば、そこから私の人生の歯車が、じわじわと音を立ててくずれていったような気がする。

ある昼下がりのこと、

私は、子供をつれて、買い物に行き、

デパートの屋上で小さい遊具に乗せて遊ばせていた時だった。

「ママ～」と無邪気に笑顔で手を振る由美。

「ほら、手を離すと危ないよ」と手を振り返した。

私はいえ「ふう～疲れた～」と言いながら辺りを見渡すと自動販売機があったので、そこで冷たいコーヒーを買い目の前のベンチで腰を下ろした。

買ったコーヒーを開け口に含もうとした時目の前に知らない男性が立っていた。

見たところ、まだ30代前半で身長が高く目鼻立ちが、はっきりしてて

息を呑むほどに綺麗で吸い込まれそうな瞳で、こちらを見ていた。

私は、その男性に声をかけてみた。

「あの〜なんででしょうか？」

するとその男性は、低い声で

「さっき、このハンカチ落としませんでしたか？」と手のひらの上のハンカチを差し出した。

手のひらには、白い、ハンカチ良く見ると隅っこの方に赤い薔薇の刺繍がしてあった。

私は慌てて膝の上に乗せてあるバックを開き中を見るとハンカチがなくなっていた。

「あっ！私のハンカチです、有難うございます。」と一礼をした。

「いえいえ〜お礼を言われることでもないのよ」「男性はそういつて

「良かった持ち主に返せて」と嬉しそうに話した。

私は「少し待ってて下さい」と男性を残し冷たい飲み物を買いにいった。

男性が待っているところまで、戻ると「どうぞ〜」冷たいコーヒーを差し出して一言付け加えた。

「お口に合うかどうかは分かりませんが」と、いつて渡した。

「ありがとう」と、言いながら私の横で、美味しいそうに飲んでくれた。

どのくらい時間が経ったのだろう・・・
しばらくその人と言葉を交わしてた。

ある主婦の昼下がり（後書き）

この小説を通して忘れかけていた優しさや相手に対しての思いやり
恋愛に対しての考え方がいい方向に変わって行き自分のマイナスな
部分、女性としての輝きなどを

プラスに変えて行けたらいいとおもいます。

この小説を読んで下さった方の中には、結婚してて、
何をいまさらと、思ってる人もいるとは、思いますが

自分でも書きながらドキドキ、ワクワクしながら
どこかで忘れかけていた、淡い思い胸の奥がジーンと
なる感じがします。

確かに、わかつては、いても道を間違った恋愛はあります。
だけど、恋愛そのものは、悪いわけではありません。

私は誰にでも現実的に起こりうる恋愛を書いてみました。

だけど、恋愛をすることによって、時には残酷でもあるし、優しく
もなります。

本を読んで、泣いたり、ワクワクしたり、感動したり恋愛の仕方、
恋について

プラスの方向になっていただければ、幸いです

恋は恋愛は女性を綺麗にもするし、忘れかけた気持ちを思い出させる

魔法なのです……

み
や
し

「予感」……………

第2章……………

彼と色々話をしていると彼が

「あ！あいさつが送れて、申し訳ありません。」と微笑みました。

私も「あ！こんだけ話して置きながら、あいさつが、まだでしたね」

と2人とも顔を見合わせながら、笑い出してしまいました。

すると、彼が「始めまして俺、森本祐二といいます」

え〜と、「私は、中川百合子といいます」と挨拶をしました。

「森本さんは、」とわたしが、いかけると彼がいきなり

「ああ〜祐二でいいです。」と、私に話しかけた。

あ、だけ〜初対面の人に下の名前で呼ぶなんてできませんと、ゆうと

彼が、私の顔みながら「いいんですよいつも祐二と、呼ばれているんですよ

照れくさそうに話しました。

それならと、おもい「じゃあ〜祐二さんでいいですかあ？」という

いいですよ〜っと、吸い込まれそうな瞳でこちらをみてこたえました。

私は、色々と話していると、なんだか楽しくて自分がどこかで忘れかけてたような、気持ちを思いだしていました。

「あの〜祐二さんと少し照れながら、質問してもいいですかぁ」と聞くと

祐二さんは、笑みを絶やすことなく「なんでしょうかぁ」「優しい言葉で言い返してくれました。

私は「祐二さんって、お幾つなんですかぁ？」と聞くと彼は、口の中に入ってた、飲み物を、思わず噴出して、笑い出しました。

私は慌てて、ハンカチを渡すと「ありがとう」と答えました
えっええと、私はびっくりして、「何で噴出すの」って聞くと、彼は

笑いながら「照れくさそうに、いつてるから、なにを質問するかと、おもったら、年齢を聞いたから、可笑しくって」お腹を、かかえながら、わらった、後にまじめな顔して私にこういつてきました。

「小百合さんって、おもしろくて、可愛い人ですね」と私の顔を真剣に見つめながら、話してきました。

私はその、吸い込まれそうなく大きな瞳に、見つめられてると身動き

出来ないほど、ジーと、見つめ返していました。

その瞳に見られてるうちに、私は、きつとこの人と、恋をすると、心のどこかでそんな予感がしていました。

どれくらい見てたのか、遠くでボンヤリ「ママ」とゆう声が聞こえて、それが段々はつきり「ママ！ママ！」と聞こえてきて、声が聞こえる方へ、目をやると、そこには由美が「ママどうしたの」

ふと、我に返って、気が付くと由美が

「もう、夕方になるから、帰ろうといって小さい手で、私の膝をゆすって、いました。

祐二さんに「そろそろ帰りますね」っと、一言いって、帰ろうとした時

ハンカチを返してもらってないことに、きずいて「ハンカチと」言いかけた時「俺が洗ってきます、又小百合さんに会えるからと」手を振って、帰っていきました。

私は、又、祐二さんに会えるのを楽しみに、胸を躍らせながら由美と手を繋いで家路に、急ぎました。

「秘めた思い」……

第3章……

由美と家路に急いだ私は、なんとか重い荷物を、玄関に置きその場で、しゃがみこんでしまった。

由美は元気良く「ただいま」と小さい靴を蹴散らし家の中へ入って行ってしまった。

私はと言えば「ふう〜疲れたと言いなながら蹴散らした由美の靴をかたづけながら、「もう〜由美ちゃん、靴はちゃんと、そろえなさい」と言いなながら小さい靴を手に取りかたづけしていた。

「さてと〜荷物を中には入れないと」っていいながら買ってきた品物を

台所へと運び冷蔵庫に一つ一つ入れていった。

品物を全部入れなおして私はお茶をコップに注ぎリビングへと行きソファ―に腰を、かけて注いできたお茶を口に運ぼうとした時由美が「あ〜ママだけずるい〜由美も〜由美も〜」っと言っていた。

「ハイハイ由美ちゃんもねえ〜」笑顔で答えると自分で台所からコップを持ってきて私の入ってる、お茶を自分のに移して、ニッコ

つとしながら、こっちをみていた。

「もう〜しょうがないはねえ〜」

由美の、その笑顔を見ると何も言えなくなってしまう。
親バカだろうか。

「美味しい？」と聞くと

「うん、美味しいよ」と答える由美

「そっか」っていいながら、私はテーブルに置いてあった、煙草に火を付けて、ふう〜と口から煙を吐いた。

それを見ていた由美がテーブルの煙草をじっ〜と見て私に、こっぴつた。

「ママ〜この煙草さっきの、おじちゃんと同じだね。」

「え？つと」私は煙草に目をやると確かに祐二さんと同じ煙草だ！

この子いつ見てたんだろって思いつつハンカチのことを思いだした。

「小百合さんと又会えるから」っていつて私のハンカチと一緒に帰ってしまってしまった祐二さん

「今頃何してるのかなあ〜」

ハッ！私は何を考えているんだろ。

少しだけ過ごした時間、祐二さんの笑顔や吸い込まれそうな瞳
思い出しただけでも、胸の奥が熱くなる。

この気持ちは何？なんで、こんなに、胸が苦しいんだろ？

こんな気持ちは胸の奥に直しておかないといけない。

「さあ〜そろそろ、晩御飯を作ろうねえ〜」由美に声をかけ
台所に向かった。

「立場」……

「立場」……

第4章……

ピンポンー
ピンポンー

「はあ〜い」

玄関にいったみると

ガツチャ、ドアが開いて（夫）泰明が帰ってきた。

「え！今日は早かったのね、どうしたの？」

「うん、仕事が珍しく早めに終わって飲みに行く予定もなかったからそれに、たまには、由美の顔を見ないと、嫌われそうだしな！」

そういつて、由美の元にむかった。

夫は大手の企業に勤務して、かれこれ7年になる。

毎晩朝早くから、夜遅くまで仕事が終れば接待だの、なんだの週に2、3回出張がある。

だから、家族過ごすのは、めったに出来ない。

私と泰明は同じ職場の営業部に勤務してた。

そこで、知り合い付き合いを重ねて、そのまま

職場結婚することになった。

私は、寿退職して、結婚2年目に由美が生まれた。

夫は、仕事からのせいかな、何でも几帳面じゃあないと気がすまない。

子煩悩ではあるが、今ひとつ女性に対しては無頓着である。

私のことも、一人の女性ではなく、お母さんだと思っただけ、いな
いみたいだ。

名前を呼ぶときも、小百合ではなく、ママとよんでいる。

仕方がないだろうけど、せめて2人で、いる時ぐらひは、名前で呼
んでほしいもんだ。

私は台所に戻りご飯を用意してた。

トントントン・・・

ジュ・・・

「ご飯できたよ。」

そう、いいながら居間に運んで、テーブルに並べていると2人の会
話が耳に入ってきた。

「由美はちゃんと、おりこうさんにしていたかな？」

「うん！」

「今日はママとデパートに買い物行って、象さんの乗り物に乗って
遊んだの。」

「へえ〜ママと買い物かあ〜良かったね。」

そんな、たわいもない会話をはなしてる。

「さあ〜おしゃべりはそのくらいで、ご飯しましょう。さめちゃうでしょう。」

食事中は3人で会話をしながら、すごしていた。

それから。こうで・・・ああ〜で・・・と話が弾んでいた時だった。由美がいきなり、祐二さんの話をし始めた。

「今日象さん乗って遊んでた時ね、ママ知らない、おじちゃんとお話ししてたんだよ。」

私はドツキつとした。悪いことはしてないのに、なにかやましい気持ちになっていた。

夫は由美に問いかけた後、案の定、私にきいてきた。

「知らないおじちゃん、はなしてたの?」

「うん!」由美はニコニコしながら、答える。

「ママ、誰知り合い?」っと聞いてきたので、経緯をはなした。

「いいえ〜まったく知らない人よ、」

「私がハンカチを落としてして、わざわざ、届けにきてくれたからお礼のつもりで、飲み物かって、話してただけよ。」

「ハンカチ？」

「ほら、薔薇の刺繍が入ったハンカチよ！」

「ああ、ママがお気に入りのかあ」

「うん、そのハンカチよ。」

それで、ああ、だの、こうだのはなすと、
夫は……

「ふ、そっか」その一言だけだった。

「さあ、ご飯も食べ終わったし片づけしないとね。」

そう、いつて洗い物を台所にもっていき水道の蛇口を、ひねった。

ジャア……

祐二さんがハンカチを持って帰ったことなど、話してはなかった。

お皿を洗いながら、祐二さんことを思いだしていた。

「小百合さんって、可愛い人ですね、又小百合さんに会えるから……」

笑顔一杯で、答えてくれた祐二さん……
私は、そんな彼の言葉を思いだしながら、頬が赤くなっていつてるのが分かっていた。

一通り洗い物を済ませ、居間に戻るとソファで、由美が寝てしまっていた。

子供をベットに寝かせソファで、くつろいでる夫の側にすわった。すると、私の顔を見るなり、こんな言葉が泰明の口からどびだした。

「ママ、どうしたの顔が赤いけど？」

「え！そう？」

「そんなに、驚かなくても、どうかした？」

「いやあ〜なんでもないよ。」

さすがに祐二さんのこと思い出して顔が赤くなったなんて、ことは言えない。

相変わらずママと呼んでるし。

「もし私が浮気でもしたら、この人焼きもちやくのかな？」

「ねえ〜パパ・・・」

「うん、何・・・」

「もし私が他に好きな人できたら、パパだったら、どうする焼きもち妬く？」

そんな話をしてみた。

「いやあ〜妬かないよ。」

「え！何で？」

「だってママは、独身女性じゃああるまいし、一人母親だし、家庭もあるし」

そんな、夢みたいな寝言いってどうするの、他の異性に恋？馬鹿ことだし、しないでしよう」

そう、夫はこたえた。

私は、なぜが悲しくなった。

結婚したら、誰かに恋をするなんて、馬鹿なこと？

じゃあ。家庭に入ったら私は、ご飯つくって、子供や夫の面倒だけみればいいってこと？

母親や妻になったら、恋は・・・

恋愛はしたら、いけないってこと？

「じゃあ〜泰明は私のこと、どう思ってるの？」

「どっつて・・・」

「それは、お母さんでしょう。」

「由美のお母さんではあるけど、僕のお母さんでもあるよ。」

「一人の女性としては、思っていないの？」そう聞いてみると

「それは、そうだよ、何馬鹿なこと聞いているんだよ、どうかしてるよ。」

やっぱり、この人は私のこと、そんな風にしか見てなかった。

私は、やはり、ママなんだよな、なんだか、涙が出そうになってい

たので、洗面台に行き鏡に写る自分の姿をみていた。

「もう一度&告白」・・・

「もう一度&告白」・・・

第5章・・・

鏡に映る自分をみながら、涙が止まらなかった。
私は母親であり、妻である夫はと言えば・・・

「由美のママでもあるけど、僕のママでもあるんだよ
他の異性に恋？馬鹿なこと・・・」

そんな言葉を思いだしていた。

「なんで、一人の女性ではないの！！！」

悲しい思いが、どんどん溢れてきて、このままではいけないと思い
服を脱ぎシャワーを浴びた。

体を洗い夫の言葉を打ち払うかのように、洗いながした。

ある程度終ると、又祐二さんのことが頭に浮かんだ

もう一度あの人に会いに行こう。

あの人なら・・・

シャワーを終えると居間にいる夫の元に行き、先に休むことを伝え
た。

「おやすみ、明日もはやいんでしょう、先に寝るね。」

「あ、うん僕も日ひと浴びしたら、寝るから、おやすみ。」

夫は私が泣いたことなど、気がつかないみたいだった。ベットに入ると泣き疲れたのか、すぐに眠りに入った。

リリリリん〜

目覚まし時計がなった。

「もう〜朝だ早いな〜」目をさまして時計を見るとA M 6時に針さしてた。

ベットから、起き上がり横で寝ている夫の寝顔をみながら、ため息がでていた。

そのまま、洗面台に向かい顔を洗い鏡を見て独り言をいつていた。

「さあ〜今日は祐二さんに会いに行こう、でも居るかな？いないと困るんだけどなあ〜

ハア〜ハンカチも返してもらわないといけないし、だけど会いたいな〜祐二さんに・・・」

ブツブツ言いながらいつものように、洋服に着替え朝ご飯はつくり、子供と夫を起こし

玄関まで、由美と2人で、夫を見送った。

「いってらしゃい気づけてね。」

「パパ〜がんばってね、バイバイ〜」

由美は少し泣きそうな感じで見送りをした。

由美の頭を撫でながら「はいはい、いつてくるから、いい子にしているんだよ。」

「じゃあ、いつてきます。」そういつて、仕事にでかけた。

掃除、洗濯、お風呂洗いまで、済ませてから、三面鏡の前に座り化粧をし始めると

背中をポンポンと叩いて由美がなにか言いたそうだった。

「ママ?どこか出かけるの?」

「あっ!うんデパートに行こうかとおもってね。」

「由美は〜ねえ〜由美も行く〜」体を横にゆすりながら話してた。

「もちろん連れて行くよ一人でお留守番はできないでしょう!」

そういつと嬉しそうに服を着始め玄関で靴を履いている。

準備が終ると早速バスに乗ってデパートの屋上に行くと祐二さんがベンチに座っていた。

「あ!祐二さんだ」私は真直ぐ彼の元に駆け寄り挨拶をした。

「祐二さん……」

彼は私を見ると笑顔で「おはよう、やっと会えた。」嬉しそうにいつた。

「おはようございます少し待っていてくださいね」そういって、子供を遊具で遊ばせ彼の所に戻った。

「あの……」

祐二さんが何か言いたしげにしていたので、話かえした。

「どうしたんですかあ？」

「これ……っと」出されたのは、ハンカチだった。

「ああ、これね、ありがとう。洗濯までしてくれたの？」見てみると綺麗になっていた。

「あーうん小百合さんの大事な物だろって思ってたね。」

「ああ、分かった？実はお気に入りなんです。小百合は祐二に笑顔で答えてた。」

するとなにをおもったか、昨日の夫との話しを一部始終、祐二に話し始めていた。

「あのねえ、昨日の夜、夫と話してて君は一人の女性ではないんだよ、みたいなことを言われたの」

一時考えてたのか、彼が、重い口をゆっくりと、開き始めた。

「そうだね、旦那さんの気持ちも分からない訳ではない、けど俺は

違うな少し」

「ん？どう違うの」

「俺はね……」

女性は既婚者だろうが、未婚者だろうが、恋愛はしていいと思う母親や、妻である前に一人の人間だし女の人だしね、それに何所でどう出会いがあるかわからないでしょう

何万、何億とゆう人間がいるんだよ、その中には、いけないとは、わかってはいても好きになることだって、あるでしょう。」

「この俺だって……」彼が言葉をとめた。

「えっ？この俺だって何？」聞き返してみたが、言おうとしない。

「いやあくなんでもないよ」

「何気になるでしょう！」「しばらく黙っていた彼

私は彼に

「祐二さんあのね、私ハンカチも返してもらわないといけなかったんだけど

もう一度祐二さんに会いたかったんだ。」少し下を、うつ向いてはなしを続けた。

「あれから、かえって、あなたのことが、なせが頭から離れなくて又会いたくなつて

ってることを、いつていると」「あの〜」彼が喋りだした。

「俺も結婚はしています。」

「えっ！結婚してるの？お子さんは？」

「はい、12歳と3歳の子供も居ます。」
そういつて彼は、ばつが悪そうに話はじめた。

「結婚生活が上手くいつてないわけではなく」「そういつてる途中で
「ああくけして、遊びとか、そんなんじゃあなくて小百合さんのこと
こんな気持ちになったのが初めてて頭から離れなくって」「

「私も同じで、夫の時の気持ちとは、全然ちがってて」「そう言つと
彼が私の手を握つてた。

「今度又ココに来てもらえますか？」
「いつでもいいので？」彼の手の温もり身動きが出来ないほどの瞳
で見つめられて私は

「あ・・・はい・・・それじゃあ、今度の日曜日に会えますか？」
「必ず来ますので・・・」「そう彼に伝えると

私は、どんでもないことを約束してしまった。

「必ず来るから、小百合さんと会えるなら、何時でも待つてるから」
嬉しそうに屈託の
笑みを浮かべてる。

彼がまだ、私の手を握っているので、ふっと手を見してみると右手に腕時計をしていた。

時計に目をやると、もう4時の所に針が来ていた。

「うううあああ~~~~こんな時間だあ」私は握っている彼の手を、ほどいて彼の顔をみてる

「ううう~~~~こんな時間になってたんだね。」少し驚いてた様子だった。

「ごめんさない。もう帰らないと・・・」

あっ!うん・・・そうだね、もう帰らないといけないね・・・」

「日曜日に来るから」そういつて由美を呼び祐二さんとその日は別れた。

帰りのバスの中で、遊び疲れたのだろう、由美は寝てしまった。

私は驚きと、嬉しさで、まだ気持ちが落ち着かない。

祐二さんと次会える日まで、後7日・・・

そんな気持ちを抱えながらバスは自宅へと向かっていた。

「次は〜童森町〜次は童森町〜お降りの片はボタンを押してくださいませ〜」

ピンポン

「はい!次童森町停車」バスは静かに止まった。

「ときめき」・・・

第6章・・・

「ときめき」・・・

バス中で眠っていた由美を起こした。

「由美、着いたから起きて！」

「んんゝもうゝ着いたの〜？」

「そうだよ、さあ！がんばって起きてねえ〜」

そう言うと、ポーっとしながらも、なんとか起きバズを降りてくれた。

私は由美の手をしっかり握って自宅に到着した。

「やっと到着したね、ふう〜汗かいてるから先にシャワーでも浴びよっか？」

「うん！シャワーシャワー由美ね〜ピーちゃんと遊ぶ〜」

由美はシャワーを、水遊びと思って喜んでいる、ピーちゃんとはアヒルの玩具である。

早めに入浴をすませ、ご飯の支度をしていた時だった。

不思議そうに私の顔を眺め何かいいたそうにしている

「ん？どうした？ママの顔そんなに見て何か付いてる？」そう由美に聞くと

「ママどうしたの？何かいいことあった？」

「いいこと？どうして？」何を急にいつてるのか分からなかった。

「だってママ何か嬉しそうだよ、いいことあった？」いきなり何を言うの、かとおもった。

「いいことかあゝあったよ。」

それは由美ちゃんと水遊びして楽しかったからと、答えた。

「そうなんだ！由美もたのしかったよ、又遊ぼうね。」そう言いながら嬉しそうに答えてた。

私は少しだけ、悪いことをしたと思ってしまった。

娘と過ごすことは、嬉しいが、けど本当の所、祐二さんと一週間後に会えると思うと、顔が嬉しさで、いっぱいだった。

まるで少女頃のように、何を着ていこう、髪型はどうしよう、などと考えていた。

私の心はトキメキで溢れていた。

そんなことを胸に秘めワクワクしていると、携帯の電話が鳴った。

ルウルウルルル電話は泰明からだった！

「ああ、小百合、今から帰るから。」

「あ、うん分かった気つけてね。」

「今日はお土産があるから、由美にいつといてくれ。」

そういつて電話は切れた・・・

それから30分後泰明が帰宅した。

「ただいま、由美、由美お土産かってきたぞ。」そういつて、急いで由美の元に行き抱き上げていた。

「パパお帰り、早く、早くお土産、お土産。」嬉しそうにしているスーツも着替えないで、ソファーに座り子供と言葉を交わしていた。

そんな2人を見ながらも、私の頭の中は祐二さんのこと、いっぱいだった。

頭の中では、祐二さんのことを思い平気な顔をして、子供と、主人を見ている私・・・

それでも、心はトキメいていた。

「初デート」・・・

「初デート」・・・

第7章・・・

あれから一週間・・・

今日は祐二さんと待ち合わせの日

私は、いつも通り夫を見送ってバタバタと忙しく家のことをしていた。

「さあ！祐二さんに会えるんだ、早く済ませて、行かないと。」

由美は近所の人に預かって貰えるように手配していた。

ある程度家事をを済ませて子供を近所の人に預けに向かった。

「由美ちゃんごめんね〜ママ用事で出かせないと、いけないから、なっちゃんと一緒に

遊んでいてね。すぐに帰ってくるから。」

「うん！いいよ」笑顔で返事をしてくれた。

なっちゃんとは、森川夏美ちゃんといって由美が生まれたときに同じ病院、病室だった為

夏美ちゃんのお母さんとすぐに打ち解け話をきたら、家もご近所で驚いたがそれ以降

仲良くさせて頂いている。

10分ぐらい歩くと夏美ちゃんの自宅の前に到着したので玄関の呼び鈴をならした。

ピンポン・・・

すると玄関の奥から夏美ちゃんの元気な声がきこえた。

「はい」

それと同時にお母さんの声もきこえてきた。

「夏美待ちなさい！勝手にあけないの！」

玄関の扉が開き夏美ちゃんとお母さんが出てきた。

「あ！由美ちゃん」笑顔で、迎えてくれたかと思うと由美の手を引っ張り家の中へ連れていってしまった。

私はなっちゃんのお母さんに一礼をして由美を預かっていたたく為挨拶をした。

「すみません、今日は由美がお世話になります。」

「もし、我がままだったら、叱ってくださいね。」そう話すと

「いえいえ、こちらこそ夏美が喜びます。」

「夕方までには、戻りますから、どうぞよろしく願います。」

私は奥の部屋のいる子供たちに声をかけた、すると2人も玄関の方へ走ってきた。

「由美、ちゃんと話すこと聞いてね、なっちゃん由美と遊んでやってね。」

「はあいゝ大丈夫だよ仲良くしてるから、ねえゝゆみちゃん！」

「うん！仲良くしてるから。」

「じゃあゝ行くね。」そういって夏美ちゃんのお母さんに一礼して出かけた。

「待ち合わせ」

子供を預けて急いで待ち合わせの場所に向かった。

デパートに到着すると、そのまま屋上に向かい扉を開いた。

周りを見渡してみても、祐二さんは、まだ来てないみたいだった。しばらく彼を待つことにした。

一時間経っても、二時間経っても祐二さんは現れない。私は少し不安になっていた。

「どうしたんだろう？何かあったのかな？」携帯の時間を見ながら開いたり閉じたりしているとしばらくして私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

声がるほづに振りむくと彼が手を振りながら、こちらへと近づいてきた。

「あっ！祐二さん」私も笑顔で手を振りかえた。

「ごめん、待ったでしょう？」

「あっ、いやそれ程待ってないよ。」その言葉を返し祐二さんを安心させた。

すると彼がホットした表情で言葉を返してきた。

「いやあ〜良かった小百合さんが来てくれて本当に嬉しいよ。」

手を握られて私は、少し恥ずかしかった。

すると彼が辺りを見回し始めた。

「ん？お子さんは？」

「ああ、ご近所さんに預かってもらっているの。」そう言つと心配そうに言葉を返してきた。

「大丈夫？預かってもらつて。」

「うん、大丈夫だよ！」

「そつか、そうと決まれば何所か場所変えようか？」そついつて彼が私の手を取り駐車場へと連れていった。

車に乗り2人でご飯を食べたり、シヨピングに映画に、ありきたりなデートを楽しんだ

あつとゆうまに、時間が流れ、もう帰る時間が迫つて来ると最後に海を見に連れて行つてくれた。

夕方の海・・・

しばらく、2人の沈黙の後ゆつくりと彼が口を開いた。

「今日は久しぶりに楽しかったよ、ありがとう。」

「こんなに楽しかったのは何年振りだろう、又俺と会ってくれる？」

私は彼を真直ぐ見て返事をした。

「あ・・うん・・私も楽しかった。」すると、彼が携帯のメアドを教えてくれた。

「こうでも、しないと連絡取れないから小百合さんの方からしてね、俺からはしない方がいいだろうから・・。」

彼とメアドを交換して、2人で夕日を眺めていた。

「そろそろ帰らないと・・。」

「そうだね、もう時間だね、送るよ近くまで。」そういつて彼が少し離れたところに車を止めてくれた。

「今日は、ありがとう楽しかった、またね。」

「うん！会える時はメールして、飛んでいくから」

その笑顔をみながら車を降り彼れを見送った

「さあ、由美を迎えにいかないと待つてるだろうなあ」

「でも祐二さんのデート楽しかった又会いたいなあ」そんなことを考えながら、由美を迎えに行き夏美ちゃんにお土産をかってお礼を一言いって家路に帰っていた。

「惹かれあう2人」

「惹かれあう2人」

第9章・・・

祐二さんと初めてのデートから2週間が過ぎ毎日が穏やかに過ぎていった。

相変わらず私は夫と子供の世話をしながら一日を過ごしている。

「ああ、祐二さんに逢いたい。」

考えても仕方ない今は、まだ逢う時間がない。
私は台所で洗い物をした。

「おーい、ママ、風呂沸いているか。」

「お風呂？沸いてるわよ！」

「由美！お風呂はいるぞ！」

そういつて、夫は由美を連れてお風呂場に入っていました。

「ふう、ママかぁ・・・」

私はリビングに腰を掛けエプロンのポケットから携帯を取り見ると

メール着信が一件と表示されていた。

「メール誰からだろう・・・」

メール受信を開いて見ると祐二さんからのメールだった。

「あつ！祐二さんからだ」

主人達が上がってこないうちにと、急いでメールを開いてみた。

「ごめん！こんな時間に、でも、どうしても小百合さんに会いたくて毎日が小百合さんのことばいっばいです・・・」

内容を見ると胸の奥が熱くなるのを覚え急いで返信をした。

「祐二さん私も逢いたい・・・連絡なかなか出来なくてごめんねけど私も同じ気持ちですもう少しだけ待ってて必ず時間作るから」

送信しました・・・

「ふう〜熱かった・・・ママ〜飲み物・・・」

「あ、はいはい・・・」

「由美ちゃん良かったねパパと一緒に・・・」

「うん！お風呂で沢山遊んだよ・・・」

私はドキドキしながらも子供に話を持って行き冷蔵庫に飲み物を取りテーブルに置いた。

「行動……」

「行動……」

第10章……

私は昨日の祐二さんからのメールが気になっていた。
仕事から戻って、ゆったりとしている夫に話しかけた。

「ねえ、パパ明日実家にいってもいいかな？」

「実家？どうかしたの？」 夫はお酒を飲みながら話を聞いてくれている。

「んん、別に用事は、たまには久しぶりに友達にも逢いたいし」

「由美の顔を見せたいしね。」

そういつて夫にはなすと「そうだね、いつて来てもいいよ、たまにはのんびりしておいで」

「帰りは迎えに来てあげるから」 夫から承諾をもら次の日実家に出かけることにした。

朝、夫を見送った後、由美を連れて実家へと車を走らせた。

私の実家は車で1時間ぐらいの所にある、周りといえば大きなデパートやら

居酒屋とか駅も近くにあり結構都会的なほうだ。

しばらく車を走らせて実家に到着すると母親と父親が出迎えてくれた。

「おお～いらっしゃい～よう来たのお」

「由美ちゃん～いらっしゃい～」母も父も嬉しそうにしている。

「バアバ～ジイ～」そういつて急いで母と父のもとに由美が駆け寄った。

私は頭をさげ家の中に入っていった。

久々の実家でのんびりして、祐二さんにメールで逢う約束をした。

「ごめんね～今日由美のことお願いね夕方までには戻るから」

「ああ～いつておいで、なんも心配しなくていいから、のんびりしときなさい」

「ありがとう」私は急いで実家を出て祐二さんの元に向かった。

祐二さんを待つていると遠くの方から一台の車が見えた。

「あつ！来た・・・」私は車の方に手を振り駆け寄ると祐二さんが現れた。

「小百合さん・・・逢いたかった」彼はそういつて私を抱きしめてく

れた。

「ごめんね、連絡できなくて」

2人で色んな所に行き時間は、あつとゆうまだった。

腕時計をみると、もう午後3時を回っている、私が寂しそうにして
いると祐二さんが話しかけてきた。

「どうしたの？具合でも悪い」心配そうな顔をしている。

「いやあ、もう帰る時間だと思って、私もうすこし祐二さんと居た
い」

そういつて目から涙が溢れだした。

「裏切り・・・」

「裏切り・・・」

第11章・・・

私の涙をみて祐二さんが車を発進させた。

しばらくすると一件のホテルが見えた、私は戸惑いながらも何もいわなかった。

駐車上で、祐二さんが話しかけてきた。

「小百合さん・・・俺は・・・」

「何も言わなくていい入りましょう・・・」

ホテルの部屋に入りシャワーを浴びてベットに入っていた。

初めて2人が一つになった。

「祐二さん・・・私このまま離れたくない・・・」

「俺も離したくない・・・小百合さん・・・小百合」2人は見つめ合いもう一度結ばれた。

ホテルから出て時間をみると5時を回っていた。

祐二さんは車を飛ばしてくれて、私を送ってくれた。

帰りに実家の近くのケーキ屋の前で車を止めてもらった。

「祐二さん又逢えるよね、又連絡する。」そういつて車を降りようとした時だった。

「小百合・・・」私の手を取り抱きしめてきた。

「必ずあえるから・・・」私は車を降りケーキを買って実家にむかった。

「ただいま〜ごめんね遅くなって・・・」部屋に入ると、シーといつて母がでてきた。

「由美ちゃん今寝たところなんだから・・・」散々遊びすぎたのか疲れて眠ってしまったらしい

「ありがとう久々に、ゆっくり出来たよ」父と母にそういつて、お土産のケーキを渡した。

私は由美の顔をみながら、少し胸が詰まるおもいだった。

夜、夫が迎えにきてくれて帰りは夫が運転をして、実家を後にした。

「どうだった？楽しめたすこしは？」夫が聞いてきた。

「んゝ久々に、ゆっくり出来たよ」笑顔で答えながらも夫を裏切ったことには変わりない

少し胸が痛かったが、けして後悔はしていなかった。

笑顔と裏腹に楽しそうに嘘の話をしながら車は自宅へとむかった。

「疑惑・・・」

「疑惑・・・」

第12章・・・

祐二さんと、あれから何度か会うようになり、2人で色んなことを話し私は夢中になっていった

由美を少しの時間だけ預かってもらったり、一緒に連れていったりした。

そんな夜のことだった。

いつものように夫が帰ってきて、お風呂を済ませ3人で、くつろいで居たときだった。

由美が今日のお昼のことを話し始めた。

「今日ね〜デパート行って、これ買ってもらったの」その手には小さなさめだが

可愛いクマのぬいぐるみだった。

「そうか〜可愛いね、ママに買ってもらってよかったね。」夫が笑顔ではなしている。

すると由美が祐二さんのことを口にした。

「違うよパパおじちゃんに買ってもらったの」夫は何とも言えない

表情をした。

「おじちゃん？どこのおじちゃん？」

「ん〜どこのおじちゃんだったけ？でもママと良くお話してるんだよ」

私はドツキとした。

「ママに後で聞いてみようね、もう遅いから寝ようね。」

「はあくい、おやすみパパ」由美を寝かし私はリビングに戻った。

「ママ？誰さつき由美がいった、おじちゃんって・・・」

夫は少し疑う目で私に話しかけてきた。

「ん、んん、ホラ！！前にハンカチの話したでしょう。」

「ハンカチ？ああ〜落とした時に届けてくれたとかいってた人」

「そうそう、その人なのよ、たまに子供と奥さん連れてデパートに来るみたいなの」

「それで、その奥さんと仲良くなってね、それで今日又あったんでその時に

買ってもらったのよ」なんとか言い訳を思いつき話して夫の反応をうかがっていた。

「なん〜だ、そっか良く会うんだ・・・」そういって少しは安心してみたいだ。

「てつきりママが・・・最近ご無沙汰だしなあ〜頻繁に出かけてるみたいだから」

「私が何?・・・」思い切って切り出してみた。

「パパまさか私が浮気でもしていると・・・パパ!」

「いやあ〜そうじゃあない・・・」夫は慌てた様子で「ご機嫌取りにきた。」

すると夫は私を抱きしめ耳元で囁いた。

「ママ〜愛してるよ今日は僕のベッドと一緒に寝よう。」

拒否することも出来ず私はその夜、夫に抱かれた。

しかし夫に抱かれながら、祐二さんのことを思い出していた。

優しい夫ではある、しかし私の心は、もう祐二さんで溢れていた。

夫は私のことを少しまだ疑っている。

「止められない想い・・・」

「止められない想い・・・」

夫に疑惑をかけられながらも私は祐二さんと会うことを止めなかった。

日を増すごとに2人は離れられなくなっていった。

「小百合・・・俺・・・小百合とこのまま一緒にいたい。」

「祐二さん・・・私もよ・・・でも・・・」

「私もし神様が許してくれるなら、地獄に落ちてもいい！」

「小百合・・・」祐二さんは、しばらく黙っていた。

私は話を切り替え少し祐二さんの家庭のことを聞いてみた。

「ねえ、祐二さん・・・」

「ん？なに・・・」

「祐二さんと奥さんって上手くいってないの？」

「最近私と会ってばかりで、大丈夫なの？」

ベットからゆっくりと、起き上がり私に話してくれた。

「小百合とあってから、いやあ、前からだけど夫婦生活は上手くい

ってないよ、夜のほうもね
アイツは俺を必要とはしていない、俺が居なくても強く生きていける。」

そういつて、少し悲しそうな顔をしていた。

私はそつと祐二さんの背中から抱きしめた。

「私は祐二さんが居ないとダメになりそうなの！もう止められないの祐二さん・・・」

私は、どうなつてもいいと思った。

「小百合・・・俺についてきてくれるか！」そういつて抱きしめられた私は黙つてうなずいた。

私は祐二さんなら私を女性として見てくれる愛してくれるそう信じていた。

自宅に着いた私は鏡の前に座り化粧を落とし、いつもの小百合に戻つていた。

「小百合・・・俺についてきてくれるか・・・」祐二さんの言葉をおもいだしていた。

「祐二さん・・・」鏡の前でボンヤリしていると、由美の声が聞こえてきた。

「ママ、お腹すいた・・・」笑顔で私にいつてくる由美の顔を見ると
何とも言えない

けど私はもう・・・あの人なしでは・・・

「さあ！ご飯作るうね・・・」

そういつて夕飯の準備をした。

「決心……」

「決心……」

あれから、夫は家に早く帰る日が多くなっていった。私のことを、まだ疑ってはいるみたいだ。

そんな夜のことだった、私と夫は深刻な話をしていた。

「ママ？僕と居て幸せ？……」急に夫は、そんな話を始めた。

「どうして、そんなこと聞くの？」

「あれから、ママは僕を少し避けているような気がして」

「気のせいでしょう、そんなことはないよ！」確かにあの夜、夫に抱かれて以来私は避けている。

「ママは、誰か好きな人でもいるのか？」私は動揺を隠せなかった。

「好きな人いるよ！」夫はびっくりしていた。

「えっ！いるの誰だよ！」

「そんなに、まじにならなくても……由美とパパに決まっているじやあない」

ウソの笑顔で答えた。

「パパゝ恋は馬鹿げている！由美にとっても僕にとってもママだつてこたえたよね」

「う、うん・・・それが」

「やはり私は貴方にとって女ではないんだよね」そうゆうと夫は何の迷いもなくこたえた。

「そうだよ！君は母親になつたんだよ！女ではないだろう」笑つていった。

「それとも、まだ乙女みたいに恋でもしたいのか！いい年して、それはないだろう」

それに家庭を守ることも大事だ、そうじ洗濯、子供の世話で、恋なんてしてる場合ではない」

そして私を決心させる言葉を夫は口にした。

「君の顔を見てごらん、20代の頃は若いから、恋もいいだろう、でも今は、年をとつて

誰が君のことを相手にする、この僕だけだよ！確かにそこら辺のおばちゃんみたいではないよ！

が、君も結婚して、子供を産めば、おばちゃんとかわりない・・・」

ショックだった。

結局、私は召使みたいなもの、誰も相手にしない！冗談じゃあない！

この人を取って私は女ではないんだ。

「もういい!」「そういって、私は先に休みベットで泣きながら祐二さんのことを思い出していた

明日祐二さん逢おう!心にある決心をして、その日は眠りについた。

「不審な影・・・」

「不審な影・・・」

第15章・・・

次の日10時に祐二さんと駅で待ち合わせをした。

車に乗り込み、しばらく走っていると後ろの方から一台の車がずっと私達の車をつけてきている。

「祐二さん、さっきから後ろの車ずっと私達の後をつけてきているみたい。」

バックミラーで祐二さんが確認していると、急に祐二さんの顔色が変わった。

「どうしたの?・・・」

「少しスピード出さず、あの車うちの奥さんの車だ!」

私はびっくりして、思わず体をしたにした。

「どうして、奥さんが、やばいよ・・・」

そいって、祐二さんの顔を見上げた。

「大丈夫だよ心配ない、小百合は俺が守るから」

そういつて祐二さんは、車を飛ばし奥さんの車をなんとか、巻き山の奥に車を入れた。

しばらくして、奥さんの車が私達の横を通りすぎると今度は反対方向に車を出し

山の奥にあるホテルに向かった。

部屋に入ると私達はひとまずソファーに腰かけ話をした。

「ふう〜危なかったね〜でも、どうして奥さんが・・・」

祐二さんは深刻な顔で話してくれた。

「実は俺が近頃良く出かけることや、携帯をみたりしているみたいなんだ。

もちろん携帯はロックを掛けてあるから、みれないんだか、それで怪しいと思ったのだろう

でもまさか、俺をつけてきているとは・・・」

「どうするの！私は、もうばれてもいい！」

そいつて祐二さんの胸の中に顔をうずめた。

昨日の夫との会話を祐二さんに話した。

すると、祐二さんは、私を優しく抱きしめ慰めてくれた。

「落ち着け小百合・・・俺も小百合と居たいこのまま・・・でも・・・」

「

「子供はどうするんだ！子供と夫を捨てて俺についてくれるのか！」
私は祐二さんの本当の気持ちがかきたかった。

「じゃあ祐二さんは！祐二さんは家庭を捨てる勇気があるの！」
私の質問に少し驚いたが、すぐに答えは返ってきた。

「俺は・・・俺は小百合を選ぶ例えこの先つらいことがあっても、俺が小百合を守る」

その言葉に私の胸は張り裂けそうになり、涙がとまらなかった。

そして、2人は一つになり私の髪を撫でながら祐二さんが・・・

「さゆり明日2人で遠くにいこう！俺は小百合しかいない！いいだろっ」

その言葉に私は、なんの迷いもなく頷いた。

「子供との最後の日」

「子供との最後の日……」

第16章……

ホテルを出て車で私を送る途中、明日の話をした。

「明日どうしたらいい？何時に待ち合わせをする？」

2人は私や祐二さんの家族にばれないようにと段取りを話し合った。

自宅近くにつき車から降りると何も言わずじっと見つめ会い車は走り去った。

私は夏美ちゃんの所に由美を預けていたので向かえに行き手を繋いで自宅に帰った。

夕飯の支度をして、由美のお気に入りのビデオをつけて自分の部屋に行き

明日の荷物をまとめた。

由美のいる居間に入るとビデオを見ながら無邪気に踊ってる娘がいる。

私は泣きたい気持ちを抑え今日一晩、由美に付き合い一緒に歌やテレビをみた。

「由美ごめんね、もう由美と会えない・・・ママを許して・・・」

私は心の中でそう叫んで泣いた。

この笑顔を、もう見ることは出来ない私は何度も自分に問いかけたが、どうしても連れてはいけない！

きっとこの子は私を怨むだろう出来れば連れていきたい、だけど・・・

私は由美を抱きしめ首に掛けてある首飾りを由美にかけてあげた。

「ママ、これママの大事なもの、どうしたの？」

「由美にあげるこれをママだと思ってずっともっててね」

「あっ！パパには内緒ね。」

そうゆうと。小さいながらも、何かを感じたのか泣きながら首飾りはずし

自分の大事な、おもちゃ箱に入れ涙を拭いて隠していた。」

「由美これ大事にする・・・ママ、」そういつて私の腕の中に飛び込んできた。

私はこらえきれなくなり由美を抱きしめ泣き出した。

「由美、由美ごめんね・・・ママを・・・許してね」

私の涙を小さい手で優しく拭いてくれた。

「ママが泣いたことパパに言わないでね・・・」

「うん！ないしょね」由美は私から、離れようとはしなかった。

そして夜・・・夫が帰ってきて、いつもの夜をすごした。

ただ一つ違ったのは由美が私のベッドで眠ってしまったと、いうことだけだった。

私はその寝顔を朝がくるまで、ずっと、見続けていた。

「遠くへ・・・」

「遠くへ・・・」

昨日子供を顔を、ずっと見ていたせいか、一睡もできないまま朝を迎えた。

私は何事も無いように夫を見送り、しばらくして実家の母に電話して、由美を預かってもらおうようにした。

母には嘘をいって、同窓会があるからと・・・

夫にはテーブルの上に手紙を書き家を出ることだけをかいた。

「ごめんなさい、貴方との生活には疲れました、どうか探さないで下さい。

由美のことお願いします。」それだけを書き残した。

実家に着いて由美を母に渡し私は家を出た。

祐二さんに連絡してあったので、実家の近くまで迎えに来てもらい車に乗り込み、走り去った。

しばらくして、高速道路が見えてきた。

私は、もう引き返せない、そう思い由美の居る方に顔を背け泣いていた。

それを見た祐二さんが車を止めて話かけてきた。

「小百合、今なら、まだ間に合う戻るか？・・・」

「いやぁ！大丈夫、私は決めたんだから、悲しいのは今だけだよ、今だけ泣かせて」

「泣きたいだけ泣いたらいい！本当に後悔はないな！」

「うん！車だして・・・」

そいつで、2人の車は高速道路へと入っていった。

どこをどう走ったのかは、分からない出来るだけ、遠くへ車を飛ばし県外へと車は到着した。」

辺りは、すっかり暗くなっている、もうすでに私のことは、実家の母も、夫にもばれてはいるだろう・・・」

そして、案の定、携帯のベルがなった・・・

ピィピィピィピィ

着信10・・・20・・・30・・・まだ！鳴ってる・・・

私は電話にでた・・・

「小百合・・・どこにいる！どうしたんだ！・・・」夫の声だった。

「ごめんなさい・・・もう掛けてこないで・・・」

「小百合・・・あなた何してるの！泰明さんにこんなことして、由美はどうするの・・・」

母も電話にでた・・・「何にも心配しないでいいから、とにかく帰ってきなさい！」

「お母さんごめん・・・由美をお願い・・・」私は携帯を切り電源も切った。

祐二さんが後ろから抱きしめ優しくはなしかけてきた。

「小百合・・・いいんだなこれで、俺の方もたぶん今頃慌てているだろう・・・」

私には後悔はなかった、そして又祐二さんにも後悔はなかった。

その夜2人はお互いを慰めながらベットへと横たわり眠りについた。

「新しい生活・・・」

「新しい生活・・・」

第18章・・・

私は、とうとう祐二さんとの愛を選び家を出た。

朝、窓を開け外を見てみると天気がよく開いた窓から気持ちのいい夏の風が吹いていた。

まだベットに眠ってる祐二さんの寝顔を見ながら少しだけ幸せを感じていた。

ホテルの電話が鳴りチェックアウトの時間ですと言われ祐二さんを起こした。

「おはよう～もう時間だって起きて・・・」

「ん、うん～もう朝かあ～おはよう小百合・・・」

そういつて私に優しくキスをしてくれた。

顔を洗い準備が終るとホテルを後にして、知らない町に車を走らせた。

「ここは、どこなんだろうね～かなり田舎ではあるみたいだね。」

「とりあえず朝ご飯を何所かたべようかあ？」

私たちは車を走らせながら、辺りを見渡し、しばらく車を走らせていると、

一件の旅館を見つけた。

「小百合、今日は、ここに泊まるう？これからのも話さないといけないし。」

「う、うんそうだね、でも高そうだよ、大丈夫・・・」

建物を見てみると立派で、どうみても高級旅館だ。

「まあ、今日一晩だけなら、いいかもね。」

「さあ、入ろう・・・」

「いらつしやいませ、お車を・・・」そういつてホテルの人が駐車場に車を回した。

いらつしやいませ・・・私たちを出迎えてくれた旅館の人数だけでも、10人は居る。

少し驚いたが、そのままロビーに行き手続きを取った。

宿泊名簿に名前を書くときに、祐二さんがぺんを取り、森本祐二、小百合と書いてくれた。

それを見た私は嬉しかった。

手続きを終え部屋に案内される途中、仲居さんが新婚さんですか？
そんな質問をしてきた。

「そうですね、この間、結婚式を挙げたんで・・・」なんの迷いも無く祐二さんは答えた。

「あら〜それは、それは、おめでと〜ございます。」

私は祐二さんの堂々とした態度に戸惑いを隠しながらも、心の中では喜んでいた。

部屋に入り仲居さんがでていくと、祐二さんが急に笑い出した。

「あはっは〜新婚さんですか、だって。」

「祐二さんたら、あんなこと言つて・・・からかったら悪いわよ、もう!」

私は窓の方に体を向け景色をながめていた。

祐二さんは、そんな私を背後から抱きしめた。

「だって俺達、もう新婚じゃん!小百合は、今日から俺の奥さんだよ!そして大事な人だよ!」

その言葉に私は、これから、2人の生活が始まる2人の新しい生活が・・・

そんな想いに、ひたっていた。

「新居・・・」

「新居・・・」

第19章・・・

旅館に到着した、その夜、今後のことを2人で話し合った。

「祐二さんこれから、どうする？何も考えないで来たはいいけど・・・」
「いつまでもホテル暮らしするのは出来ないしね・・・」

「そうだね、明日、部屋探しにいくかあ？」

2人共、何かあるか分からないので、金銭的なことは、それなりに、お互いが持つては、きていた。

私も銀行から、全額のお金を下ろしていた。

次の日、旅館を後にした、私達は町まで車を飛ばし近くのパーキングに車を止めて町の中を探索した。

見た感じ、それなりに大きな所ではあった。

何時間ぐらい歩いたのだろうか・・・

何軒かの不動産屋をみて、張り紙をみながら、一件に絞り込みそこで部屋を探した。

しかし、保証人やら、なんやらで、まだ部屋は見つけられそうになかった。

そこで、先に2人で働く場所を探した。

コンビニでアルバイトの本を買い働けるところを探し一枚のページに目がいった。

そこは、とある工場が募集の広告をだしていた。

急、求むと書いてあり夫婦でもOKと書いてあった。

すぐに電話をして、面接を受け私は事務の受付、祐二さんは工場内の仕事をする事になった。

面接をしてくれた社長は私達を本当の夫婦ではないと、見て、話せるところ、までで、いいから事情をきかせてくれといつてきた。

祐二さんは少し考えていたが、全部は話さないで少しだけはなした。

社長は、仕事を、きちんとしてくれれば、問題はないといい、住むところにも困る

だろうから、会社の寮を使えばいいと、いつてくれた。

それ以上は何もきかなかった。

私達は、社長の言葉に今は甘えることしかできなくて、感謝をして、会社の寮に住むことを決めた。

寮は仕事場から、20分ぐらいのところにある。

建物も、しっかりしていて、わりと綺麗な寮であった。

これから、しばらくの間、ここが私達の新居となる。

部屋に案内され、入ると仕事は明日からでいいと言われ

まだ何も無い部屋に荷物を置き、その日は早めに休むことにした。

布団も何もないタタミの上で、ごろ寝をした。

だけど私は嬉しかった祐二さんに体を寄せて深い眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868e/>

あなたは、素敵な恋をしていますか？それとも・・・

2010年10月15日23時06分発行